

文化財の保存と修復

科学で探る

先達の知恵

主催 文化財保存修復学会

後援 文化庁/台東区/朝日新聞社/東京国立博物館
日本文化財科学会/国宝修理装演師連盟
全国大学博物館学講座協議会/全日本博物館学会
NPO文化財保存支援機構(JCP)
会場 東京藝術大学・奏楽堂

開催趣旨

文化財には、往時それがつくられ、使われ、伝承されてきた過程において、多くの先達の知恵が込められています。その素材、製作技法、保管方法などは、まさに人類の長い歴史のなかで培われた技術の結晶ともいべきものです。文化財の保存、修復を行うためには、これらの伝統的技術を理解することがきわめて重要であることはいうまでもありません。しかし、これらの技術は「技」、「秘法」として徒弟制のなかで代々伝えられてきたものが多く、その理論的理解は必ずしも十分とはいえないものでした。しかし、近年の科学技術の進歩により、新しい科学的手法によって、それらが解明されつつあり、その成果が実際の保存、修復に活かされています。このように、文化財の保存、修復は、代々伝えられてきた伝統的技術と最新の科学技法とを駆使して行われているのであり、そのための多くの調査、研究がなされています。本シンポジウムでは、これらの調査、研究成果について、具体的な事例をもとに紹介します。本シンポジウムを、文化財の価値とその保護のたいせつさを考えるよいきっかけとさせていただければ幸いです。

PROGRAM

平成15年10月19日(日)

9:40~10:30	開会挨拶と基調講演 文化財を通して知る先達の知恵 会長、実行委員長/独法・国立博物館 三輪 嘉六
	講演 I ●座長 東京藝術大学 稲葉 政満
10:30~11:00	源氏物語絵巻に隠された技法の秘密を探る 東京文化財研究所 三浦 定俊
11:00~11:30	“赤”に込められた古代人の願い—出土赤色顔料の謎— 独法・国立博物館 本田 光子
11:30~12:00	江戸時代に華ひらいた世界に誇る日本の金工技術 奈良文化財研究所 村上 隆
12:00~13:30	昼食 講演 II ●座長 元興寺文化財研究所 村田 忠繁
13:30~14:00	不可能を可能にした驚くべき古代建築の発想と技術 東北芸術工科大学 宮本長二郎
14:00~14:30	5000年の人類の知恵—漆芸の秘法を解き明かす— 東京文化財研究所 加藤 寛
14:30~15:00	“木の文化”は“保存の文化” 東京国立博物館 神庭 信幸
15:00~15:15	休憩
15:15~16:30	質疑応答・討議 コーディネーター 西浦 忠輝 パネリスト 三輪 嘉六/三浦 定俊/本田 光子/村上 隆/宮本長二郎 加藤 寛/神庭 信幸
16:30~16:37	総括 会長、実行委員長/独法・国立博物館 三輪 嘉六
16:37~16:40	閉会の辞 実行副委員長/東京文化財研究所 西浦 忠輝

2

基調講演 文化財を通して知る先達の知恵**文化財保護への先達の知恵。壬申検査と指定制度**文化財保存修復学会会長、実行委員長 / 独立行政法人国立博物館 **三輪 嘉六**

明治30年(1897)に制定された「古社寺保存法」は、わが国の文化財保護が指定制度を基に展開してゆくことの第1歩となるものであった。これ以後、今日の文化財保護法にいたるまで、文化財を保護していくための制度は定着し、文化財の分野、対象も文化的なあらゆる面に及んでくる。また、近年では、新しい文化分野への関心と、その保存や活用への取り組みもみられる。

こうしたこれまでの文化財保護への軌跡の背景には、特にその保存や修復において、先人たちの科学的、伝統的な技術、材料、手法に支えられてきたことが多い。そうしたことは普通の習慣のなかでも行われていて、たとえば、ほとんどみかけなくなってしまうが、「目どうし、風どうし」といわれるような曝涼行事(虫干し)は各種の文化財を保存していくためのもっとも基本的なものであったし、今日でも改めて見直さなければならないことでもある。また土蔵や桐箱のような保存環境も先達の築いてきた保存の知恵というべきものである。

一方、こうした有形、無形の文化財保存、継承への動向は明治初期には廃仏毀釈の嵐のなかにあって危機を迎えることになるが、それを乗り越えるひとつの原点となったのが、明治5年(1872)の社寺宝物検査、いわゆる壬申検査である。近代の文化財調査の嚆矢をなすものであると同時に、指定制度へと展開してゆくわが国の文化財保護に向けての大きな足掛りとなるものであった。いわば文化財の悉皆調査のあり方を示すものであり、文化財保存のためのもっとも基礎的な調査として、今日的意義には高いものがある。

源氏物語絵巻に隠された技法の秘密を探る

東京文化財研究所 三浦 定俊



11世紀初めに紫式部の書いた『源氏物語』54帖は、平安時代から江戸時代にいたるまで、いわゆる『源氏絵』として数多く描かれ、『源氏物語』はわが国における代表的な古典的画題であったと考えられる。ここでとりあげる源氏物語絵巻は、平安時代後期(12世紀前半)に各帖から1~3場面を選んで絵画化して描いたもので、現存する源氏絵のなかでもっとも古く、あとの時代に描かれた数多くの『源氏絵』に比較してはるかに優れた作品として国宝に指定されている。現在、「蓬生」から「東屋」にいたる19の画面と詞20段が名古屋の徳川美術館と東京の五島美術館に残り、「若紫」の画面残欠が東京国立博物館に所蔵されている。

紙に顔料で描かれた人物は、目や鼻を1本の線で表す「引目鉤鼻」の技法で描かれている。この技法は当時の典型的な描き方であるが、どの線も細部まで神経が行き届き、顕微鏡でどれほど大きく拡大してみても破綻がない。また、場面は右斜め上から俯瞰するように描かれているが、巧みな構成と場面に合わせて色使いとで画面に変化をつけて、登場人物の心の内までみる人に伝わってくる。

この源氏物語絵巻は、1950年前後に徳川本を秋山光和氏らがX線透過撮影などで調査し、研究成果を『光学的方法による古美術品の研究』(吉川弘文館1955、増補版1984)などに公表している。その後、科学的手法による調査の機会がなかったが、東京文化財研究所は徳川美術館、五島美術館と協力して数年前より源氏物語絵巻の顔料や制作技法に関する科学的調査を行う機会をもつことができた。詳しい成果は研究報告書として来年公刊される予定であるが、ここでは、そこで用いられた科学的手法を中心に解説する。



ポータブル蛍光X線分析装置を用いた源氏物語絵巻の顔料調査

3

“赤”に込められた古代人の願い 出土赤色顔料の謎

独立行政法人国立博物館 本田 光子

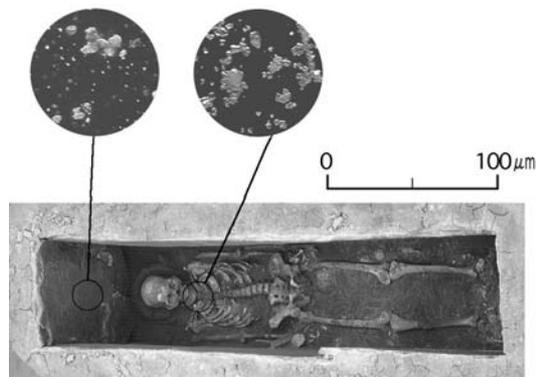


縄文、弥生、古墳時代の墓の内部が現代の光に曝されたとき、しばしば鮮やかな“赤”が私たちの眼に飛び込んでくる。この“赤”はほとんどがベンガラ(酸化鉄)や朱(硫化水銀)という名の水に溶けない赤い粉末、つまり赤色顔料である。死者に赤色顔料を施す行為は汎世界的現象であるといわれており、“赤”は人類にとって特別な色「血液、太陽、火の象徴」であることがさまざまな学問分野で論究されている。日本の古代人もまた、葬送やその他さまざまな場面で赤色を使用した究極の根源はそこにあったのかもしれない。

しかし残念ながら、現在の私たちが確実に認識できる当時の赤色は、鉱物からつくられた赤色顔料であるベンガラや朱だけであろう。染料の色は時とともに変化、消滅することがほとんどだから。器物の彩色や葬送儀礼における朱やベンガラ、そして、染織品の茜や紅花など多様な「赤色のヴァリエーション」は、当時の古代人にとって実際にはどのように認知されていたのかわからない。

今、私たちが古代人のメッセージとしてうけとることのできる“赤”は朱やベンガラであるが、日本ではいつのころからか、この2種類の赤色顔料をさまざまな場面で使いわけるようになる。墓では、埋葬施設はベンガラで塗布され、遺骸にだけ朱を施すことが行われていた。器物の彩色では一般的にはベンガラが多用されているが、特別な場合には朱が用いられていたり、朱だけで彩色された特殊な用途を目的とした土器や石器が存在する。この2種の赤色顔料は同じ赤でも素材の違いから使用目的が異なっていたようなのである。

残された“赤”の色、特に「朱とベンガラの使いわけ」という事象から古代人の観念の世界をかいまみるために、墓のなかでの赤色顔料の使われ方を丹念にみて、その謎に迫りたい。



大分県宇佐市別府遺跡の石棺墓と赤色顔料

江戸時代に華ひらいた世界に誇る日本の金工技術

奈良文化財研究所 村上 隆



金属という素材を加工し、「モノ」をつくる技術、これが「金工技術」です。日本には弥生時代に伝えられた渡来の技術です。しかし、古代から中世を経て、そして近世にいたる時代の移りかわりのなかで大きく発展を遂げます。金属は、本来、地球の一部である鉱石から人間が苦勞してとりだした材料です。私は「金工技術」を、これまでより広い視野でとらえることにしています。鉱山から鉱石を掘りだし、さらに鉱石から金属をとりだす技術まで含めようという試みです。その意味では、江戸時代に日本の金工技術はまさに頂点に達します。江戸時代初期には、日本は銀や銅の金属素材を海外に輸出する、世界でも有数の資源大国となります。そして、金、銀、銅、さらには鉄にいたるまで、すべて自前で調達した材料で、高品質な「モノづくり」を展開したのですから。



棹銅吹の図(『鼓銅図録』より)
(東京藝術大学附属図書館蔵)

江戸時代には、仏像や釣鐘はもちろん、刀とともに、鐺や三所物(斧、小柄、目貫)などの刀装具や、簪などの装身具にいたるまで、機能性とともにより意匠性を追求した金工作品が数多く生みだされました。これらの作品は、さまざまな金属材料の特性を勘と経験によって知り尽くすとともに、細かい細工を実現するために磨きぬいた手の技の結実が発露した結果でした。じつに多くの金工家が研を競いました。

また、日本の金工技術の特徴は、「色」の扱いにもあります。金属特有の光沢を利用するとともに、金属が潜在的にもつ特性を顕在化することで目的とする色を生みだす「誘色」の技術にも注目していただきたいものです。

江戸時代に華ひらいた日本の金工技術を、最先端の材料科学でひも解きながら、先達の知恵に学びましょう。

4

不可能を可能にした驚くべき古代建築の発想と技術

東北芸術工科大学 宮本長二郎



日本の伝統的木造建築技術は、仏教寺院建築の導入以来、いわゆる堂宮大工によって技術開発が進められ、秘伝・口伝として伝承されてきたが、古墳時代以前の建築技術は未熟なものとするのが一般的な認識である。

しかし、これまでの発掘調査成果、とくに各時代の埋蔵建築部材によって、継手仕口や架構法の基本的な形式の多くは縄文時代まで遡ることが明らかとなった。たとえば10数年前までは、高床建築は弥生時代以後、貫の使用は鎌倉時代以降とするのが定説であったが、ともに縄文時代に遡る確実な証拠が発見されている。

現存建築で貫使用の最古例である東大寺南大門(1199年)は十字貫を多用しているが、貫出現当初からこのように発達した形式であろうはずはなく、8世紀の平城宮ですでに十字貫を使用している。貫の下端と上端を接して交叉する背違貫は、中世仏堂の小屋組と近世建築に普及しているが、弥生時代後期と古墳時代後期の柱材に背違貫穴があり、十字貫より古く遡るが、ともに十分に発達していた貫工法が古代以前に存在していたことを示し、縄文時代に貫が発生していたことも肯けるのである。

鎌倉時代再建の東大寺伽藍は、中国に学んだ新技術をとりいれて再建されたとされるが、財政的困難から大勤進職辞退を申し出た重源は、古くから発達した貫工法を自在に駆使し、工期を半分に縮めるユニークな発想で解決した。

このシリーズですでに発表した出雲大社古代16丈本殿の大工棟梁もまた重源と同様に、在来工法に従いつつ、発想の転換によって当時不可能と思われた大規模神殿をつくりあげる。

2人の先人たちが創造した形式は普遍化しなかったが、その発想は確実に時代の技術発展に寄与したものである。



東大寺南大門の下層南面組物
6段重ね肘木の2・4・6段目は柱を貫いて北面組物と一連となり、柱筋で東西貫と交叉して十字貫とする

5000年の人類の知恵 漆芸の秘法を解き明かす

東京文化財研究所 加藤 寛



「日本人は、英会話が下手だ」といわれて理由を聞くと、多くの人が「海に囲まれているからだ」、あるいは「外国人が少ないからだ」と答える。ほんとうにそうだろうか。疑問が湧いてくる。オランダ人がオランダ語以外の言葉を使うのは多くの国と交易を行うために、必然的に相手の言葉を読さなければ商品が売れないのである。同じように自国でつくった商品を世界中で売るためには外国語が必要になる。正確な答えは、日本やフランスなど英語を話さなくてもすむ国は農業国なのである。つまり、隣の国へ行って商品を売る必要がなかったから英語の普及が遅れたわけだ。平安時代、中国に送った遣唐使のなかに能筆で有名な日本人が2人いたという。しかし、彼らが十分に中国語を話していたら筆談する必要もなく、能筆などという評価はうけなかったに違いない。

最近、漆芸の技術のなかでもこのような誤解があることに気がついたことがある。漆芸品の製作者に「なぜ漆器に布を貼るのですか」と質問すると、必ず補強のためと答える。しかし、補強のためであれば、十分な厚みの木材を使って、丈夫な組み手で製作するほうが強度のある木地がつくれそうである。げんに、奈良の正倉院御物の唐櫃は、厚い春日杉の板の両端に凹凸をつくり、組み手に組んで接着し、長い釘を打ってから櫃の角だけに筋布を貼っている。補強とするならば、まさにこの方法だと考える。それでは、なぜ木地の表面に布を貼るのだろうか。この答えは日本独自の研出蒔絵の技法に関係する。研出蒔絵は漆で文様を描き、金銀の粉を蒔きつける。さらに、表面全体に漆を塗り、乾燥後に炭で表面を研ぎ上げて文様とする技法である。漆の塗膜の厚みは約50 μ m。砂粒ひとつの穴があっても研出蒔絵は完成しない。つまり、布を貼り何層もの下地をつけ、漆を塗るのは、研出蒔絵に必要な平滑な表面をつくる必要があるからである。

919年に、弘法大師が唐からもち帰った30帖の冊子を納めるためにつくられた宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱(国宝 仁和寺)は、平安時代に完成した研出蒔絵で文様が描かれる。宝相華や葡萄唐草などに唐風の文様の名残がみられるものの、迦陵頻伽には和風化が進んでいることがみてとれる。現在は、銀の蒔絵の錆が広がって線描が太くみえるが、透過X線写真では銀の錆が写らずに製作当初の完全な研出蒔絵の姿が蘇る。透過X線写真をよくみると、文様の下に格子状の影が写しだされている。これが、木地の上に貼った布目である。「なぜ漆器に布を貼るのか」という質問の正解は、研出蒔絵を描くためである。



宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱



同X線写真

“木の文化”は“保存の文化”

東京国立博物館 神庭 信幸



はじめに

日本の国土はその60%以上が森林に覆われ、杉、檜、松、クヌギ、ナラ、ブナなどの有用な樹木が23,590,000ヘクタールを占めている。世界的にみても、古代文明が栄えた地域、あるいは現代文明が繁栄する先進諸国で、これほどの割合で森林を有する国はない。木材は、日本人の生活と深いかわりをもちながら利用され、その文化は今も確実に息づいている。

木材の利用

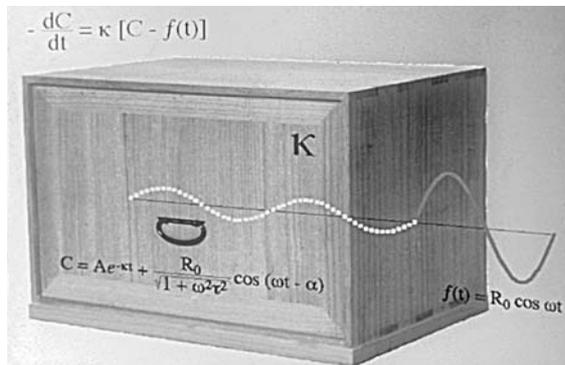
人が安らぐための生活空間として、木造民家や家具・調度品などには木製品が多く使用される。木材の面積が大きいほど、それがむくの木材であればなおさら、人の生活空間に相応しいと考える向きはいまだに根強い。また、高級品が木製の箱に収納されることは特別なことではなく、日本人にとっては身近な感覚である。こうした木材特有の質感や性質を重要視した利用は、日本の文化の特質のひとつである。

木材の効用

森林は、地球規模的な環境と生態系の維持に不可欠な資源である。人間は森林の恵みである木材がもつ効用をとりこみ、生活を豊かにしてきた。たとえば、木の匂いや木目には心理的な安らぎを与える効果がある。加工が容易で耐久性があるため、建築物、道具、家具などに古くから利用されてきた。特に、木箱や箆笥は、木材の調湿効果によって優れた収納容器となった。

調湿効果が保存に効く

正倉院宝物庫は、校倉造の木造建造物である。倉の内部は外気よりもはるかに安定した環境であることが研究で明らかになった。杉あるいは桐箱の内部の温湿度変化も、同じように小さいことがわかっていて、木材の調湿効果によってそれらは説明できる。正倉院宝物は、きわめて安定した環境に長期間保管されてきたことになる。それによって、宝物の劣化は最小限に抑えられ、今日まで伝えることが可能になった。こうした経験は、保管場所や容器の考え方に日本人に影響を与えているだけでなく、有効な方法であることが科学的にも確かめられている。



桐箱の内部の相対湿度変化が減衰する様子を、調和振動の方程式によって模式的に示した図

6

講演者紹介

三輪 嘉六(みわ かるく)

文化財保存修復学会会長。独立行政法人国立博物館九州国立博物館(仮称)設立準備室長

1938年生まれ。日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同文化財鑑査官、日本大学教授を経て、98年より九州国立博物館(仮称)設立準備室長。

専門は考古学、博物館学、文化財学。

文化審議会文化財分科会の各専門委員、独立行政法人評価委員会委員(文化分科会)をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

三浦 定俊(みうら さだとし)

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所協力調整官

1948年生まれ(鹿児島県)、71年東京大学工学部卒業、73年東

京藝術大学大学院修了(保存科学専攻)、同年東京国立文化財研究所保存科学部研究員。保存科学部長を経て、2003年より同研究所協力調整官、東京藝術大学大学院美術研究科(文化財保存学専攻)教授(併任)。

専門は保存科学(物理計測)。現在、文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)日本代表・理事、国際保存学会日本支部(IIC-Japan)副会長、文化財保存修復学会諮問委員、日本文化財科学会理事などを務める。

主な著書に、『文化財科学の事典』(編著、朝倉書店、2003)、『古美術を科学する』(廣済堂出版、2001)、『平等院大観』(共著、第3巻 絵画、岩波書店、1992)、『光学的方法による古美術品の研究』(増補版共著、吉川弘文館、1955、増補版1984)など。

本田 光子(ほんだ みつこ)

独立行政法人国立博物館九州国立博物館(仮称)設立準備室保存修復主幹

1975年明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業、78年東京藝術大学大学院美術研究科保存科学専攻修士課程修了。九州歴史資料館、福岡市埋蔵文化財センター、別府大学文学部文化財学教授を経て、2003年より現職。専門は文化財保存学と考古学。特に弥生、古墳時代の赤色顔料について研究。著書に、「湖北省荊州出土漆器の保存科学的調査」(『福岡からアジアへ』西日本新聞社、1997)。

村上 隆(むらかみ りゅう)

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所主任研究官。学術博士。

1978年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科修士課程修了、85年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、88年同博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所入所、現在に至る。文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会評議員・幹事、京都造形芸術大学非常勤講師。

専門は歴史材料科学。文化財保存科学の視点から、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史的変遷を追求している。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せている。

著書に、『金工技術』「日本の美術 443号」(至文堂 2003)、『色彩から歴史を読む』(共編、ダイヤモンド社)、『博物館の環境管理』(共訳、雄山閣)、『文化財は守れるのか』(文化財保存修復学会編)、『Japanese Traditional Alloys』(Butterworth)、『古代金工における金属接合技術』(『文化財論議』)、『文化財不可視情報の可視化 見えないものを見る視座』(クバプロ)など。

宮本 長二郎(みやもと ながじろう)

東北芸術工科大学歴史遺産学科教授

1967年9月東京大学工学系大学院博士課程中退。67年奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部技官、78年同遺構調査室室長、86年同建造物研究室長、91年文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官、94年東京国立文化財研究所修復技術部部長、95年同研究所国際文化財保存修復協力センター長を経て、99年より現職。

著書に、『原始・古代住居の復元』(至文堂、2001)、『平城京』(草思社、1986)、『飛鳥仏教』(『図説日本の仏教・奈良仏教』小学館、1989)、『飛鳥時代の建築と仏教伽藍』(『法隆寺から薬師寺へ』講談社、1990)、『弥生・古墳時代の掘立柱建物』(第29回埋蔵文化財研究会資料、1991)、『東大寺』(新潮社、1992)、『日本原始古代の住居建築』(中央公論美術出版、1996)。

加藤 寛(かとう ひろし)

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所修復技術部伝統技術研究室長

1951年生まれ(東京都)。76年東京藝術大学大学院(修士課程)美術研究科漆芸専攻修了。81年高知大学教育学部講師、82年助教授、87年東京国立博物館資料部資料第一研究室長、92年同研究指導室長、93年同学芸部展示調整室長、94年東京国立文化財研究所修復技術部第一研究室長、2001年独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所修復技術部伝統技術研究室長、東京藝術大学美術学部教授。現在、漆工史学会幹事、美術史学会会員、日本工芸会正会員、日本文化財漆協会会員。専門は漆工史研究。最近海外に所在する輸出漆器の研究も行っている。

著書に、『漆芸品の鑑賞基礎知』(至文堂、1992)、『土佐の漆芸』(南の風社、1993)、『海を渡った漆器』(『技法と表現』日本の美術 至文堂、2002)。論文に、『琉球漆器に関する一考察』(『伝統的修復材料の調査研究』2002)、『輸出漆器の様式について』(『近世輸出漆器の保存と修復3』2002)、『鼓胴をめぐる2、3の問題 能楽鼓胴の成立について』(1999)。

神庭 信幸(かんばん のぶゆき)

東京国立博物館文化財部保存修復課課長。学術博士。

1979年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授を経て、98年より現職。専門は保存科学。特に文化財の保存環境と修復技術ならびに初期油彩画に関する制作技術に関心をもつ。

著書に、『科学の目で見る文化財』(アグネ技術出版センター、1993)、『高橋由一絵画の研究 明治前期油画基礎資料集成』(歌田真介編 中央公論美術出版、1994)、『文化財の輸送、展示、收藏のための小空間における湿度・水分の変化に関する保存科学的研究』(学位論文、1997)、『京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査』(国立歴史民俗博物館研究報告76集、1997)、『FT-IRスペクトル法による法隆寺古材の劣化の解析』(木材学会誌、1997)、『色彩から歴史を読む』(ダイヤモンド社、1999)、『文化財の梱包と輸送』(『輸送工業包装の技術』、フジテクノシステム、2002)など。

西浦 忠輝(にしうら ただてる)

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所保存科学部長

1970年東京農工大学卒業。75年東京文化財研究所入所、修復技術部主任研究官、国際文化財保存修復協力室長、国際文化財保存修復協力センター長代理などを経て、2003年より現職。ICOMOS(国際記念物遺跡保存会議)石造物専門委員会副委員長。

専門は保存科学。現在は屋外文化財の環境、劣化と保存修復対策の調査研究を行い、中国、タイ、カンボジア、パキスタン、エジプトなどで保存修復プロジェクトを推進。

共著書に、『文化遺産の保存と環境』(朝倉書店、1995)、『アジア知の再発見 文化財の保存修復と国際協力』(クバプロ、1996)、『おもしろアジア考古学』(連合出版、1997)、『世界の文化遺産を護る』(クバプロ、2001)、『文化財科学の辞典』(朝倉書店、2003)などがあるほか、保存修復に関する論文多数。

稲葉 政満(いなば まさみつ)

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存科学助教授

1985年東京大学大学院農学系博士課程修了。岐阜大学農学部助手、東京藝術大学美術学部助手、講師を経て、95年より現職。文化財保存修復学会運営委員、マテリアルライフ学会常任理事。

専門は保存科学、製紙科学。特に紙の保存性に関する研究。図書館や文書館の紙資料保存問題や和紙の技術発展史にも興味をもつ。

主な著書に、『図書館・文書館における環境管理』、共著書に、『保存科学入門』、『和紙の手帳』、『記録史料の保存と修復』、『考古資料分析法』、共訳書に、『博物館の環境管理』など。

村田 忠繁(むらた ただしげ)

(財)元興寺文化財研究所歴史民俗資料研究課長

1977年駒澤大学文学部卒業、87年元興寺文化財研究所入所、出土金属製品保存処理室長、情報室長、文書修復室長を経て、2002年より現職。文化財保存修復学会運営委員、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会役員。種智院大学非常勤講師。

専門は保存科学。特に文化財の透過試験や史料保存に興味を持つ。

著書に、『固着した古文書類の簡便な展開法の研究 凍結真空乾燥法を利用して』(『平成9・10年度文部省科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書』1999)、『X線透過試験の現状と課題』(『元興寺文化財研究所研究報告2001』2002)、『Conservation Science of Modern Archival Material asa Cultural Property』(中国文物保存技術検討会要旨集2002)。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にあって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。
(「入会のおしり」より)

連絡先

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学 光葉博物館内
Tel: 03-5432-0620 Fax: 03-5432-0622
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp
http://www.soc.nii.ac.jp/jsccp/

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長 三輪嘉六
副委員長 西浦忠輝
委員 稲葉政満・川口法男・神庭信幸
杉山真紀子・桐野文良・村上 隆
村田忠繁
補佐委員 秋山純子・建石 徹

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復 世界に活かす日本の技術

文化財保存修復学会編 / B5変形版 / 119頁
ISBN 4-87805-025-X C1070 / 本体価格1,400円(税抜)
平成15年5月30日第1版発行
本書は平成14年10月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 世界に活かす日本の技術」の講演収録集です。

基調講演 日本の技術がどう活かされているか

文化財保存修復学会会長
独立行政法人国立博物館 三輪 嘉六

特別講演 日本に期待されるもの 世界の文化遺産の保護
早稲田大学 吉村 作治

和紙と刷毛による貢献 世界に広がる装填技術による修復技法
昭和女子大学 増田 勝彦

インドネシアの木造建造物保護をめぐって
日本の建造物保存技術を活かす
文化庁 大和 智

なぜ日本が石造建造物の修復か アンコール遺跡の保存修復
早稲田大学 中川 武

シルクロードに眠る都をよみがえらせる 交河故城の保存修復
(株)文化財保存計画協会 矢野 和之

地域に根づく技術の開発と応用 ガンダーラ仏教寺院遺跡の保存
東京文化財研究所 西浦 忠輝

うつぶせの石像を起こす イースター島モアイ像の保存修復
奈良文化財研究所 沢田 正昭

パネルディスカッション

文化財の保存と修復 歴史遺産と環境

文化財保存修復学会編 / B5変形版 / 107頁
ISBN 4-87805-011-X C1070 / 本体価格1,400円(税抜)
平成14年6月10日第1版発行
本書は平成13年11月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 歴史遺産と環境」の講演収録集です。

基調講演 歴史的環境の保存

文化財保存修復学会会長 / 日本大学 三輪 嘉六

特別講演 歴史と環境
京都造形芸術大学 芳賀 徹

主に遺跡の復元活用に関連して 文化財観光資源と環境
奈良文化財研究所 田辺 征夫

京町家の保存と再生 世界遺産京都の歴史的環境と景観論争
京都府立大学 宗田 好史

美術工芸品の修復をささえるもの 伝統的修復技術を取り巻く環境
京都府教育庁 石川 登志雄

人類の責任で解決を 地球規模の気候変動と歴史遺産
東京文化財研究所 西浦 忠輝

大気汚染から文化財を守れ 世界遺産奈良の大気環境
奈良大学・同大学院 西山 要一

美しい街の再生と創出 災害と歴史遺産
京都造形芸術大学 内田 俊秀

パネルディスカッション

<問い合わせ先>

(株)クバプロ内「文化財の保存と修復」事務局
〒102-0072 千代田区飯田橋4-6-5 NKS飯田橋ビル4F
e-mail: webmaster@kuba.co.jp http://www.kuba.co.jp
TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837